

氏名	紀野 洋孝
ヨミガナ	キノ ヒロタカ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第357号
学位授与年月日	令和3年9月30日
学位論文等題目	〈論文〉 別宮貞雄作曲《智恵子抄》の歌唱に関する研究 〈演奏〉 別宮貞雄：歌曲集《智恵子抄》他

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	永井 和子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	塚原 康子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	杉本 和寛
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	福島 明也
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		川上 洋司

（論文内容の要旨）

本論文は、歌い手の視点から、別宮貞雄の最後の歌曲集《智恵子抄》における歌唱と演奏について、そして詩の深い解釈のもとに成り立つ音楽の分析と考察を行ったものである。この歌曲集がもつドラマティックで感動的な詩と音楽の根源がなにか、さらに別宮が目指した芸術が如何なるものかを明らかにすべく、「別宮貞雄作曲《智恵子抄》の歌唱に関する研究」として作品の考究を進めた。

歌曲集《智恵子抄》の題材となっている高村光太郎の詩集『智恵子抄』は、彼が亡き妻に捧げた愛の詩集で、1941年の刊行から80年の時を超えてもなお、人々の心を揺さぶる名作である。これに感銘を受けた別宮は、歌曲集のために9編の詩を選び、二人の愛の物語を抜粋する形で1982年に作曲し、歌曲集《智恵子抄》として新たな息吹を与えた。

序論では、筆者がこの歌曲集を知ったきっかけ、選曲の理由、作品の魅力に加え、『智恵子抄』の内容についておおまかに触れ、本論で行う分析と考察の内容、先行研究について、及び本論文の構成を提示した。

第1章では、作曲家・別宮貞雄を取り上げ、生涯や作品について検討した。別宮の生涯は、別宮自身が残している文献をまとめ、記録されていない晩年とその後については、遺族から聞き取りを行うことで完結させた。物理学者になることを夢見て、東京帝国大学理学部物理学科で学んだ後に、パリ音楽院に留学した異色の経歴をもつ別宮の、人生や人柄について調査した。また、別宮の残した作品群から声楽を伴う作品を中心に取り上げ、歌曲集《智恵子抄》がどのような位置にあるかを検討した。これらは、演奏・研究するうえで欠かせない土台となった。

第2章では、《智恵子抄》を概観した。成立事情について、作曲、初演、評論、楽譜、録音を調査し、他者の《智恵子抄》で採用された詩と比較しながら、別宮が『智恵子抄』の何に重きを置いて作曲したかを検討した。また緒言などで別宮が《智恵子抄》について語った様々な文章から、《智恵子抄》がどのような意思で作曲された歌曲集であるか考察した。

演奏する上で核となる、歌詞に採用された9編の詩については、同詩集の散文「智恵子の半生」をもとに、光太郎と智恵子の人生、作詩の背景、また、光太郎の他の詩などを参考にしながら多角的に考察し、さらに光太郎の抱く様々な葛藤や心境の変化にも触れた。

第3章では、1、2章の検討と考察をもとに、別宮がどのように『智恵子抄』を読み込み、如何なる技術を用いて作曲しているか、全9曲の分析を通して考察した。

《智恵子抄》のドラマティックで感動的な音楽は、オペラ作曲などの経験で得た様々な技術を用いて作

曲されていた。この技術により《智恵子抄》は歌曲という枠を超え、オペラのような壮大な作品に仕上がっていた。そして、これを歌唱するために、どのような技術や工夫が必要か、実際に歌唱・演奏することで得られたことを論じた。

結論では、以上の考察を通して見えた歌曲集《智恵子抄》について、この歌曲集で別宮が目指した音楽と、作品を深く掘り下げることで見えてきた側面、そして今後の課題と展望をまとめた。

このような分析と考察から、一冊の詩集すべてが智恵子について綴られ、さらに散文「智恵子の半生」でもその暮らしを詳しく書き記した、極めてストーリー性の強い『智恵子抄』を題材としていること、そして別宮の30年以上の作曲経験、特にオペラ作曲で得た日本語と西洋音楽を融合させる技術などの応用が、歌曲である《智恵子抄》を、オペラのような劇的で壮大な作品に仕上げていることがわかった。また、別宮が作曲時に施した和洋の融合は歌唱時にも必要で、自然な日本語のニュアンスを追求する歌い手の意識と工夫が大切であった。別宮が築いたこのような技術の精巧さは、《智恵子抄》を究極の日本歌曲にするとともに、日本歌曲という分野の水準を上げる大きな一翼を担っているに違いない。

実際に歌唱・演奏することで得られた知見を土台に論じた今回の論文は、筆者一人では成り立たないものであった。それは、歌手である筆者が直接聴く自身の声や音楽と、空間にこだまして離れた場所で聴く音に大きな違いがあるからである。また《智恵子抄》は、歌唱だけでは賄いきれない詩の背景を裏付けするピアノの役割が重要であり、ピアノの森裕子先生とのアンサンブルで新たに増えてくる《智恵子抄》の世界観が多くあった。そして、これらを冷静かつ的確に判断する指導教員の永井和子先生のレッスンと、その中での議論や展開で得た内容が本論文の核となっている。

《智恵子抄》は光太郎と別宮が何十年という歳月をかけて築いてきた作品である。今後、ことあるごとに演奏し、筆者の人生が音楽に与える表現を模索、また反映させながら、《智恵子抄》の感動を多くの聴衆と共有し、さらに成熟させていくことが筆者に与えられた使命である。

#### (総合審査結果の要旨)

##### <論文>

「別宮貞雄作曲《智恵子抄》の歌唱に関する研究」と題された申請者の論文は、歌曲集《智恵子抄》をいかに歌唱するかという歌い手の視点から、高村光太郎の詩とそれに付曲した別宮の音楽を分析し、考察を加えたものである。

第1章で別宮貞雄の生涯と活動を簡潔にまとめ、第2章において高村光太郎の『智恵子抄』についての考察を行っている。様々な文献を用いて原作の本質を浮かびあがらせようとする姿勢は誠実であり、楽曲分析同様丹念である。続く第3章の「実践における分析と考察」が本論文の山場であるが日頃の稽古やレッスン、更にピアニストとの協働の成果を微細に記録しており貴重である。特に抑揚が平坦だと言われる日本語をいかに明瞭かつ自然に届けるかという別宮の思いに迫り、日本語への意識が強く感じられる内容となっている。これは本研究を通じて日本歌曲そのものをどのように捉えるかという大きな問題意識がその規定をなしていることのがえる内容である。

《智恵子抄》に対する思い入れが強すぎて文章表現にところどころ飛躍がある点等、修正を要する箇所が見られるが、演奏者として自身の実践を通して楽曲に対する理解を深めて行く過程を言葉にすると共に、論文執筆の中で見出した楽曲の特性や解釈の問題を演奏表現に繋げることで得たものは大きく、今後の演奏における一指標を示している点で本論文は貴重な研究成果となっている。

##### <演奏>

令和3年8月2日(月)16時開演。第6ホール。ピアノ：森裕子

前半：歌曲集、《淡彩抄》全10曲。後半：歌曲集《智恵子抄》(改訂新版)全9曲。

作曲時期も曲調も対極にある2つの歌曲集に取り組んだ極めて意欲的なプログラムである。申請者の研究テーマである《智恵子抄》を浮かび上がらせるかのように配置された《淡彩抄》は申請者の持ち味である温かみのある柔らかなテノールの声で歌われ、この曲集の題名とされた淡き香りの漂う世界観を

見事に味わい深く表現していた。

後半の《智恵子抄》は、別宮が「各篇が長大で詩句も長く、扱いかねた」という言葉と共に「わたしの究極の歌曲である」と言い残した作品である。論文執筆で究めたことが演奏表現として見事に昇華され、協働するピアノと共に全曲がひとつのモノオペラを形作っているようなドラマ性の高い世界を現出し圧巻であった。両作品を通して、日本語発音を音楽化するうえでの適確さ、美しさ、ピアノッシモからフォルテまでの幅の広い表現のしなやかさがある。加えて特にドラマ性を必要とする後半作品の力強さ……それは前半作品の淡き世界観と見事に対照を成し、演奏の奥行きを示していた。

この日の演奏はまさに「語る (parlando), 歌う (cantando)」によって織りなされる、別宮の求めた歌曲の世界に魂が宿ったと言えよう。初演から何人かのバリトン歌手によって演奏されていた作品だが「本来のテノール全曲演奏を得ていないのが心残りである。」と言い残した別宮への献呈となったと言える。

論文、演奏ともに、博士課程においてじっくり時間をかけて取り組んできたことが遺憾なく発揮されており、実技系学生にとって望まれるべきスタイルの研究手法・成果であり、博士学位に相応しい優れた成果を挙げたものと評価する。

以上5名の審査員により博士学位取得合格とする。